
霧の回廊 壱

伯修佳

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の回廊 壱

【Nコード】

N4787M

【作者名】

伯修佳

【あらすじ】

『柳里の華』の番外編、国王楠と玲彰の話。

王と十七の侯爵が治める、異世界の王宮。

数え切れない程の女性と関係を持ってきた王と、研究にしか興味を持たない無感動な女。

どうせ女は皆同じだろう。

気まぐれで選んで、耐えられずに一旦は手放した。

その妻と、ふとした折に彼は再会する――

起（前書き）

『柳里の華』本編読了後に読む事をおすすめしますが、読まなくても大丈夫なお話となっています。

時間的には本編よりもやや後の設定です。

起

王宮は濃い夜霧に包まれていた。

雨を予感させる湿った空気が、建物を取り巻く川とも見紛う外堀から流れ込み、深い色の帳となつて外界から全てを隠してしまふ。それはこの時期の王都付近には珍しくない事だつた。

人気のない宮殿の石廊下に、静寂を憚^{はば}るかの様な密やかな足音が響き渡る。

足音を立てているのは男、名を楠王という。十七ある侯国を支配下に置く、この王宮の主だ。

普段なら眠れない夜は——普通の日でも、だが——どこかの女官の元へ行くなどしている彼ではあつたが、たまたま内宮での執務が長引き流石に疲労が情欲を凌いだ。

故に今更女官達の住まう西宮の扉を叩くのも何だか億劫で、眠気が襲うまで自らの起居する内宮で堀の流れでも眺めようと思いついた。ただそれだけだつた。

王宮は東西南北と内宮を細長い回廊で繋がれている。各宮殿と違い、外廊は水の影響を鑑^{かん}みて石で建てられている。支柱に両脇を支えられた廊下を歩き進めると、冷たい感触の音が余韻の尾を引いて霧に溶けていった。

しばらく歩いて目的の露台に近づいた頃、彼の視界の隅をするりと掠める人影があつた。

——誰だ……？

最初は怪訝そうに——ややあつて好奇心がむくむくと頭をもたげて、彼は足早にその影の後を追つた。夜回りの衛兵にしては格好がおかしい。

そう、男ではなく、恐らく――

――若い女だな。

彼が今いる露台は、西宮とも確かにそう離れてはいない。ありえない事ではなかったが、ちらと見た限りでは余り見覚えのない者の様な気がした。王宮に仕える女官は数百人を超える。それでも若く特に美しい女性は一度見たら忘れない彼であつたから、未知の存在にひどく興味をそそられた。

女は露台の手摺に両腕を添える様にして、こちらに背を向けて佇んでいた。薄い羽衣にも似た部屋着一枚で上着も羽織らず、為に上等な布地は緩やかな流れを作つて持ち主の細い身体の曲線を柔らかく現している。

水近くの事で一層靄は深く、姿は臃おぼろにしか見えないというのに、品良かったおやかな気配が伝わってきた。人ならぬものにさえ思える程に。

こうなると調子が良いもので、さっきまでの疲れなど何処へやら、彼は静かに女の背後、視界が届く程の位置まで歩み寄つた。

――いや、見知らぬ女ではないな。

確かに何処かで見た女だ。だが、それが誰のものだったかまでは思い出せない。うつすらとしか覚えていないところを見ると、ここ暫く見ていない女なのだろう――などとあれこれ考える。ようやく考えるのを止めて女に声を掛けようとした時、女の方から後背の気配に気づいたのか振り返つた。

「……………皓慧様？」
こうけい

楠王は驚愕した。万民の上に立つ君主として、生半可な事では驚

いたり慌てたりしない筈の彼ではあったが、全く予期せぬ人物の登場にかつてない程動揺させられていた。心臓が乱れ打って、鳥肌が立つ程に。

「玲彰——^{れいしょう}何故、こんな時間にこんな所に」

有に四年もの間、不仲が続いていた彼の妻がそこに立っていた。

楠王は、十五の歳を迎える頃にはその漁色の才に目覚めていた。彼は一国一城の主、望めばどんな女でも手に入れる事が出来たが、若い頃から忍び遊びが好きだった。

身分を隠して王都に下り、好みの女を見つけては声をかけて陥落させる。始めは大抵の女は訝しむものである。だが彼の整った容姿と、身に纏った高貴な雰囲気惹かれる者も中にはいたし、回数を重ねていく毎に次第に女心のどこを突付けば気を——そして身体を許してくれるのかを学んでからは、彼は好きな時に好きなだけその場限りの逢瀬を楽しむ事が出来た。

——王都にこれ以上芳しくない噂が流れるのは、君主の名を汚します。せめて王宮の侍女達にお手を付けるに止めて下され。

「ご意見番網淵老侯爵に諫言され、渋々女ばかりの西宮を巡回するようになったのが二十三の歳の事である。」

一声名を指せば唯々諾々と寢所に侍る躰しづが良いばかりの女達は物足りなかったが、楽しみ方はそれまでと変わらない。ただ彼は伽を命ずるだけではなく、女達の話をよく聞いた。

さもその女に関心がある様に、氣遣つている様に。
華やかに見えて寂寥せきりょう溢れる女の園に住む彼女等は、構ってくれる

男なら誰でも良いのだ、とある時彼は気づいた。

女の柔肌は心地よかったが、心は裏腹に冷め切っていくばかりだった。

それでも西宮自体は知つてみると中々興味深かつたし、話から事によると女たちの内情や綱紀が窺える。取り締まりには確実な情報源だった。おまけに話を聞いてあげる事によつて、王であるだけでなく、男としても愛される事を彼は知っていた。好かれるのは悪い気はしないものである。

——貴方様は女性がお好きなのではなく、本当は誰よりも女性を蔑んでいらつしやる。

いつか宮女の一人が泣きながら彼にこう言つた事があつた。夜離れを恨んで発せられたその言葉は、彼を永久に女から去らせてしまつた。何より厄介なのは女の嫉妬と説教である。そんなものにいちいち向き合わなくても、他に彼を受け入れる女は数え切れないほどいる。また別の女の元へ行けば良い。

だから四年前のあの時、西宮と内宮の往復にさすがに飽きて研医殿に赴き、玲彰に初めて出会つた時も彼は思つたものである。——この女もすぐに陥落出来るだろうと。

玲彰は王妃となつた時に冠された号である。名は肅瑛^{しゅへい}、国を支える十七本の柱の筆頭、箕浦侯爵の長女だった。

幼少の頃から神童の誉れ高い閨秀で、当時父親が長を務めていた研医殿において二十歳という破格の若さで局長の位を頂いたのは、決して七光りなどではないとつとに有名だった。容貌も浮世離れる程に美しかつた彼女は、一目で漁色の王の食指をそそつた。

とんでもございません、あれは少々風変わりな所がございます。

とてもお后様など務まりません——あくる日、楠王が王宮にて彼女について尋ねた時、本人の父親は苦笑しながらそう言った。

楠王は既に二十八の歳を迎えており、さすがにそろそろ王妃を迎えねばならなかった。

彼自身は、西宮の女の誰かが子を成せばその者を立后する気ではたが、なかなかそう巧くは行かない。侯爵達の——網淵侯が特に——后を、という意見は最早無視出来ないものになっていた。だから聞くついでに「肅瑛を后に迎えたい」と、彼は箕浦に至極何の気なしに提案したのである。筆頭侯爵の娘で賢い上に美貌となれば、これ以上の縁組はない様に思えたから。

事この件に関して侯爵から拒否される筈などないと高を括っていた楠王は、重ねて固辞する臣下に面食らった。

王妃ともなれば、国の貴族の娘もその親も、一度は夢見る地位だとばかり聞いていたし、王が身を固める様箕浦もまた強く願っていた筈である。彼ほどの重鎮が、自分の娘を嫁に出せないとはどういうわけか。

矜持も手伝い楠王は意地になって、手を変え品を変え父親を説得しようと試みた。最初は頑として譲らなかった箕浦であったが、何日か説得が——時には断れば王妃は迎えない、などという脅しが——続いたある日、彼はようやく首を縦に振った。単に根負けしたのではなく、それまで拒絶していた当の本人である肅瑛が、いきなり承諾した為であったという。

こうして彼女は楠王の閨房に入る事が決まり、西宮はようやく王后を迎える次第となった。

承

王は身分柄、その名を呼ばれる事は少ない。

貴族とは違い姓はかばねなく、即位と共に号を前王より賜る。

呼び名は号に尊称である陛下をつけるのが当たり前とされていた。彼を名前で呼べるのは、彼より目上に当たる前国王夫妻——もう既に亡くなっているが——か、彼と対等とされる王后のみであった。ならばいかにありえない状況であつても、目の前にいるのは妻玲彰に間違いないのである。

彼女は露台の手摺からなかなか離れようとしない。平生から、表情に乏しい為に感情が読み取れない女ではあつたが、今日は珍しく戸惑っているのが楠王にも看取れた。いつもなら真つ直ぐ彼を射抜いてくる視線が、所在無く床近くを彷徨さまよっている。

「珍しいな。西宮に来ていたのか」

己の声に棘が含まれない様、楠王は注意を払った。

嫌味を言っていると取られたくない——そこまで考えて、彼は自分に呆れた。何と可笑しな精神作用であらう。

この女は他人の心証に気を払う繊細さは持ち合わせていない、それはわかりきっているはずなのに。

「はい、今日は先刻まで内宮にて網淵候と話がありましたので」

——多分、俺自身に聞かせたいのかもしれない。

もう目の前の女には興味も執着もない、その証を己の中に見つけたいのだらう。勿論、微塵もないのだ。全くどうかしている。新婚当初の自分でも度し難い程の執着の記憶は、四年経った今でも彼の

中に残っている。感情の残滓ざんしが時折蘇る、ただそれだけの事だ。
年を取っても矍鑠かくしゃくとしているが故に、信頼度と比例して煙たい存在である老侯爵の名前が出た事に彼は眉をひそめた。

「網淵と？ …… 珍しい取り合わせだな」

玲彰は答えない。代わりに両腕で自らを抱きしめて如何にも寒そうに身震いしてみせた。

「そんな格好でうろついているからだ。風邪を引いても知らんぞ」

素っ気無く言い放った後で、ふと思い直す。

「候と何の話をしていたのだ」

「……ここでは少し…… 申し上げるわけには」

およそ彼女にはそぐわない歯切れの悪さ、それが楠王の——最初に抱いたのとは全く違う——興味を誘った。

「何だ、どうせこんな時間だ。人目があるわけでもあるまい」

焦れた彼は、妻のただでさえ青白い顔色が更に青くなっていくのに気づいた。

「わかった。ここからなら其方の殿よりも私の部屋の方が近い。そこで話を聞こう」

と、自ら着ていた外套を彼女の肩に掛けて、足早に先に立って歩き出した。

玲彰が西宮の正殿に輿入れした当初、楠王は他の女官を放って毎晩彼女の許に通い詰めた。まっさらな紙の様な透明感溢れる美しさを、己の好みに染め上げようと意欲を燃やしたのである。

彼女は今まで学問しか知らずに育ったせい、男女の仲について何一つ知識を持っていなかった。深窓の貴族の娘と言えども、乳母や母親からそれなりの知識を教え込まれるのが慣例だったが、彼女はその機会に恵まれなかったらしい。

——まあ良い。変に知識があつて抵抗されるより、素直である事だしな。

閨^{ねや}での彼女は、夫に命じられる事に難色を示すでもなく淡々とそれを受け入れた。のみならず、幾度か床を共にするうちに一度でも望まれた全ての事を掌握し、おおいに彼を悦ばせた。無表情なのが玉に瑕^{きず}だったが、いい妻を得たと最初の内彼は己の選択に満足していたものである。

しかしその満足は長くは続かなかった。いくら時が過ぎても、閨以外の玲彰の夫に対する態度はよそよそしく、平坦なままだった。数多くの女と関わって来ただけあつて、彼は確かに妻が駆け引きを楽しめる様な女ではないと気づいてはいた。

だが所詮は女なのだ。基本的に女は感情ですぐに己を変える。こつさえ掴めばすぐに自分を求めて従うであろう、絶対的な自信があった。あつたはず、だった。

——不思議な女だ。

たとえどんなに普段から優しくしても、抱きしめて体温ばかりが

上がったも、身体の奥底には氷の芯が通っている。自分は決してそこに辿り着けない——そんな気がした。

今までの楠王なら、さっさと見切りを付けて他の女官へ通うのを再開していただろう。

だが何故か彼はそうはしなかった。意地になって、手を変え品を変え妻の関心を自分に向けようとしたのだ。したたかに傷つけられた矜持を挽回したかったのもあったが、彼女の徹底した「謎」に惹きつけられて、すっかり虜になってしまっていた。

残念な事に、彼の努力は全く功を奏さずに終わる。蜜月も丁度六の月を過ぎた頃、瓦解は突然始まった。

いつもの様に彼が正殿を訪れると、肝心の妻は部屋にはいなかった。いきなり外出していたのである。王が西宮に渡る時、事前に誰の許に行くのか必ず側仕えの女官に告げられる。そもそもが西宮から出られないのが女達の定め、女主人不在は前代未聞の椿事となった。

——申し訳ございません。主はただ今研医殿に出向いております。ご自分がなされました難しい研究を引き継いだ部下の方が、何やら問題を起こしたとの事で。

驚愕と激怒を押し殺した冷やかな王の怒りに、王后付きの侍女荷葉はひたすら平伏するばかりだった。怒りをなんとか抑えて更に問うと、妻は今晚は疎か数日は戻らないと言い置いて出て行つたと言う。火に油を注ぐが如しだった。

怒りに任せて引き返し、楠王はそのまま研医殿の玲彰の研究室に乗り込んだ。部下数名と計器を睨んでいた錠破りな妻は、罪状を弾劾する夫の言い分をひとしきり聞いた後、

——この部屋は無菌室です。身体を消毒してからいらっしゃいましたか？

とだけ冷静に問いかけた。謝罪する所か、言い訳すらしなかった。王はそれを機に妻の許へ通うのを止めた。まるで異国の理に暮らす如き彼女の言葉に、怒りを通り越して寒気を覚えたからであった。

玲彰は玲彰で、夫の夜離れなどどこ吹く風、といった体でほとんど研医殿に入り浸りの生活へと逆戻りして行った。

規則を破ったとはいえ、過去に王后が公共施設を経営する例はなかったわけではなく、当の王が考えるのを放棄した為、いつのまにか一件は有耶無耶となった。

以降二人はろくに顔を合わせる機会もないまま、早四年の歳月が流れた。

転

「それで、何の話をしていたのだ。あの爺おやじの話す事だから、どうせ小言に決まってるだろうが」

潇洒しやうせいな広い寝室は、照明を落としてあるので薄暗い。寝台の手前にある、長卓と二脚の長椅子の脇に首の長い照明が灯っているきりだ。妻の顔の輪郭しかわからない曖昧さに苛立って、彼は中央の照明を灯そうとした。

「——今日の会議で話題になった件について、助言を受けました」

伸ばしかけた手が止まる。長椅子に座る細い影を見返した。

ぼんやりと白く光る頬の脇を流れる、金褐色の艶やかな髪に一瞬目を奪われ、内心舌打ちしたい思いに駆られる。闇に紛れて尚、滑らかな肌艶は色褪せる事がない。

——美しい女ならば、他にいくらでも西宮にいると言っのに。

「何だと。しかしあの件については、私が却下したではないか」

楠王は雑念を追いやって答えた。今はそんな事を気にしている場合ではない。

「はい。ですから候は『陛下に嘆願するしかないだろう』と申しておりますが」

「駄目だ駄目だ！」

玲彰は顔を上げ、夫を見返した。いつもと違い、両眼には強い意志が浮かんでいる。研究が絡むといつもこうだ、と楠王は更に苛立った。

「皓慧様、今一度説明をお聞き頂いて——」

「何度聞いても同じだ！ 其方達研究者は知識に奢るばかりでおよそ人倫と言つものを無視して憚^{はばか}らん。わかっているのか？ 意図して生命を創るといふのは自然の法則にももとの所業なのだぞ」

内宮で行われる会議には、国政に直接関わるもの以外にも様々な議題が持ち込まれる。

研医殿での研究目的についての承認もその一つであり、如何に重要な研究であつても最終的に王の承認が下りなければ研究予算は組まれない事になっていた。

「よくお考え下さい。一方で皐乃街の様に堕胎させる薬が罷り通る世界があるのならば、その逆があつてもまた然るべしではないのですか」

子が生まれぬ夫婦の為の治療薬を研究したい——そのどこが人倫にもとる事なのか。玲彰の揺るぎない態度がそう告げている。

確かに理屈はわからないではない。

わからないではないが——

「……あの頑固爺が賛成する筈だな。まるで私に対する当て付けだ。しかもそれを其方が言つとはな」

怒りを押さえ、低く吐き捨てた。皮肉を通り越して滑稽^{こっけい}だとさえ思える。

玲彰は何も答えない。黙ったまま、静かに立ち上がった。

「網淵も焼きが回ったものだ。私の逆鱗である事を知っていながら、何故」

そこまで言つて、楠王は口にしようとした言葉を飲み込んだ。

「――何を」

玲彰は卓を回つて夫の目の前にいきなり近づいて来た。のみならず、驚いた事に身に纏っていた衣服を脱ぎ始めたのだ。

「馬鹿な真似はよせ！」

女の裸など見慣れている楠王ではあったが、流石に唐突な展開に一瞬怯んだ。その隙に玲彰は素早く夫の首にしなやかな腕を巻き付けて唇を奪った。

――その感覚を何と呼べば良いのか、彼は表現する術を知らない。目眩にも似た戸惑い。ああ触れてしまった、ただそう思った。重なり合った唇から舌を伝つて、苦い液体が入り込んで来た事に、氣付いたのは随分と後になってからだった。

四年前に玲彰との一件があつてから、王は箍^{たが}が緩んだかの様に漁色を再開した。

だがそれまでと少し違ったのは、相手にする女を情熱的で奔放な型に限定した事だった。冷静で知識深い女も以前はそれなりに楽しめたものだが、今の彼には苛立ちを誘う存在でしかなくなっていたのである。わかりやすい精神作用とも言えた。

——あんな色気に乏しい女に夢中になるなど、私もどうかしていたものだ。

記憶が塗り替えられていくうちに、冷静に彼はそう分析した。このままで行けば妻の事など綺麗に思い出になるだろう、とさえ思っていた。

しかし王と王后は公式行事には必ず臨席しなければならず、その度に結局彼は苦々しい感情に苛まれる事になった。何故これ程までにこの女は人を不愉快にさせるのだらうと、理由を深く考える事もせずに。

——それは余りに危険なのではありませんか。

研医殿の実験室にて玲彰が己の提案を告げると、副院長の坂之内は神経質そうな眉間に更に険しい皺を寄せた。

貴族出身の上司と違い、民間の出身である彼は生粋の研究者というわけではなく、幾分か良識的な見解も持ち合わせていた。もっとも、彼の上司は桁外れに人の心の機微に疎いから、比較する相手としてはあまり適当とは言えなかったが。

——あれはまだ試作段階です。人で実験するには早いと思います。しかも相手が悪すぎる。もし副作用が出たらどうなさるおつもりか。

動物実験では何の問題もなかった——そう平然と言い切る上司の神経が、彼には理解出来なかった。この人にとっては、自分を含めた全ての人間が——例え相手が一天万乗の存在であっても、ただの被験体に過ぎないのかもしれない。

坂之内の困惑など当の本人は意に介した様子もない。責任は私が一人で取る、と話題の的である薬剤を玻璃の瓶に詰めている。

——西宮には戻られないのですか。その、以前の様には。

出過ぎた言動とはわかっていたが、王と彼女の夫婦仲の悪さは国内の全員が知っている。

返答は短かった。これまた彼の予想通りであったが。

結

所詮人は他人を求めた所で、己の孤独を埋められる事など出来はしない。

現に、今まで彼が関わり求めて来た女の誰一人としてそうはしてくれなかった。一時的に欲望が満たされるだけだ。

ましてや、と楠王は思う。

この女は——この女だけは無理だと、もう四年も前に結論が出ているのに。

なのに何故、あるはずのない温もりを探してこの手は動くのか。

「……私に何を飲ませた」

繰り返し重ねた唇を離して、囁く声が擦れた。

「媚薬の様な……ものです」

「——そうか」

それだけで彼は納得した。ならば答える玲彰の声が心なしかいつもより優しく聞こえるのもきつと気のせいなのだろう。

勝手な事をされた怒りよりも、媚薬を使ってまで妻が自分を求めたという事実には驚くばかりだった。

——色仕掛けで承認を取ろうというのか。

如何にも目的の為に手段を選ばない彼女らしい。そうして自分はまた、古傷を抉られるのだろう。

妻の両腕が己の背中に回された時、楠王はあれこれ考えるのを止

めた。そんな事は後で考えればいい。もし何であれば色仕掛けに乗って承認してやってもいい、とすら思いながら。

「……其方は本当に勝手な女だ」

言葉と裏腹に、楠王の声音には諦めの響きがあった。熱を解き放った名残で、意識は心地良い疲労の海に溶けていく。胸に抱いた妻の耳に囁いた。

「こう言うのも何だが……其方にしては思い切った事をしたものだ」
玲彰はそれには答えなかった。

「露台で堀を眺めている時——賭けをしました。もし今夜貴男が見つからなければ……選択は間違っていたのだと」

「ああ、あの時か。確かに考え込んでいた様に見えたな——」

楠王は微笑った。だが覗き込んだ妻の顔は殊の外真剣である。

「ここは霧があまりに濃くて、飲み込まれそうでした。進むべき事なのか……それとも戻るべきなのか」

茫洋とした眼差し。以前西宮にいた頃と何一つ変わっていない。だが、彼女がこんな風に話をする事はなかった。

「ああ、霧か。しかし、あんなものここでは珍しくもなかるう。何故今頃」

「……こんな夜更けに外廊に入る事は初めてです。まるで——私から——の様で」

「肅瑛？」

昔の様に妻の名を呼ぶと、彼女は何故か怯えた様に見開いた。焦点を結ばなかった両眼が、一瞬だけではあったが、間違いなく正面から夫を捉えた。

楠王は自分の目を疑った。

——何だ、今のは？

「……何でもありません」

そう言いながらも、夫の胸にしがみついて来る。かつてない仕草に楠王の身体に再び火が灯った。全ての疑問を脇に追いやって、彼は己を揺り動かす衝動に従った。

見渡す限りの、白く朧ろげで不確かな世界。

彼女が物心ついた時から、全ては霧に閉ざされた様に曖昧だった。家族も屋敷の使用人達も、ただ彼女の周りにうつすらと存在している。言葉は聞こえるもののひどく遠い。何を言っているかは理解出来るが、意志の疎通は難しかった。それが当たり前なのだろうと彼女が納得するに至った頃には、周囲との壁は決定的なものとなっていた。

肅瑛お嬢様は変り者だ——使用人が陰口を叩いているのを彼女は聞いた事がある。無礼だと怒る以前に、そうか、変わっているのか

と逆に納得した。それが悪い事かどうか、十五の年に母親が病で亡くなるまで彼女には判別がつかなかった。

——肅瑛お嬢様は血も涙もない。あの様にご自身を気に掛けて下さったお母上様がお亡くなりになったと言うのに、泣きもしなければ平然としていらっしゃる。

冷たくなった母の傍らで泣き崩れる妹を横目に眺めながら、彼女はぼんやりと考えた。

何故妹の様になれないのだろう。母は優しく時に厳しい、悪くない親だったと思う。もっと悲しんでいいはずなのに。

——そもそも『悲しい』とはどんな状態なのか。

いくら考えてもわからない。霧は年々濃くなっていく。このままではいずれ飲み込まれてしまうだろう、それだけはわかった。

娘の行く末を懸念した父親が、彼女を研医殿に入寮させたのは二十歳の頃だった。元より勉学に才を発揮したのもあったが、茫とした世界にも原因と結果が明確な研究というものはつきりと存在した。姿を見る事はなかったものの、以来彼女は昼夜問わず研究に没頭した。

——お嬢様。まさかお断りになったと言うのですか？

家族の姿もよく見えない自分が、他人の家族になるなど考えられなかった。例えそれが父が頭を垂れる相手だとしても。

なので断った。侍女の荷葉は乳姉妹のせいか彼女の性質を一番気に留めない。それでも流石に驚きを隠せないしかった。

——でもまあ、正しい選択なのかもしれませんね。こう申しては何

ですが、陛下は女遊びの激しい御方と伺っております。並み入る側妾のかたがたの中に入って、ご苦労されるのも如何いかにかと。

女遊びというのはどういうものなだろう。彼女は侍女にそう尋ねた。自分に見えないもの——人を使って「遊ぶ」なんて、と。恐らく常人とは違った意味で理解の域を超えていた。

荷葉は渋い顔で答えた。

——手当たり次第に女の方に手をお付けになるとの話ですよ。思うのですが、誰でも良いというのは、結局誰の事もお好きではないという事なんじゃないでしょうか？ どちらにせよ、妾わたしにはわかりかねますが。

他人事なのに荷葉は怒り心頭だった。

不思議だ、と彼女は逆に興味を持った。自分が家族を愛せないのは「見えない」からだと思っていた。それなのに、国王は見えるにも関わらず「誰の事も好きではない」というのだろうか。

ずっと考えていた。もしこの白い世界に「誰か」がはつきりと存在したならば、自分はその人を疎むだろうか。歓迎するだろうか。

他人に興味を持つ事など皆無に等しかった肅瑛の世界にこの時、最初に楠王は輪郭を得た。

その人にはどんな世界が見えているのだろうか、と。

結（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました。

この番外編には続編「弐」があります。

少し大人の展開が進んだ弐の方も、宜しければご覧下さいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4787m/>

霧の回廊 壱

2011年5月28日18時04分発行